ディベート　イラク戦争班

班員　　賛成派　　荒井　逸香、島村典古、山口智子、渡邉薫平
反対派　　伊尾木貴晴、煤孫杏子、中塚正記、山口歩子

今回のディベートのまとめ

イラク戦争、さらに突き詰めれば、アメリカのイラク攻撃に対して、賛成派の意見としては、フセイン政権下において抑圧されていた民衆の解放のためには必要な行為であった、および、イラクの大量破壊兵器所持の疑いが色濃く、そのことは世界を脅かすものであったために、平和維持の観点からも今回の攻撃は必要だったという意見があがった。

一方反対派からは、あれはイラクという一独立国家に対するアメリカの内政干渉であるといった意見や、イラクの石油資源およびその利権を狙ったものであるという意見、さらにはアメリカのイラク攻撃の正当性が全くなかった(先制攻撃と美訳された侵略戦争である)という意見が上がった。

では、イラク問題を扱った記事（メディア）に目を向けてみる。これまでのところ、アメリカがフセイン政権を崩壊させたということを賞賛するものよりも、アメリカの攻撃を批判する記事のほうが圧倒的に多い。というのも、アメリカはこれまでのところイラク国内において大量破壊兵器といえるような武器を発見できておらず、さらにはイラクの軍事的兵器は国連の指示通りに順調に破壊作業が進んでいたということのほうが明らかになったためである。また、イラク戦争での戦死者数よりも、イラク国内における米兵を狙ったテロによる死者の数が上回ったということも、米国の性急な判断に対する批判的意見を強調させた。

ここで、一見反戦派、つまり戦争反対の立場のほうが優勢であるように思われた。しかし、そのとき、賛成派の立場から、「戦争以外の手段があったのかどうか」という意見が出された。それを考慮してみると、確かに戦争反対する者たちの中で、明確な代替案を提示しているもの、また、それができるものは皆無に等しいのではないか、という点も多々あったことに気付いた。これまでの反対派の意見は、ただただ戦争反対を訴えるのみにとどまった、ある意味で実を伴わないものではなかったか。戦争を回避するための代替案なくしては、反戦を主張することは難しいのではないか。この時点において、反対派にとっては手詰まり状態になってしまった。

しかし、だ。代替案がなかったからといって、では、今回の戦争はある種の「必要悪」として認めてしまっても良いのだろうか。もし、今回それを認めてしまった場合を想定してみよう。「必要悪としての戦争」といわれたら、それがまかり通るのであれば、今回のイラクに対するアメリカの先制攻撃（侵略）およびイラク戦争はある意味で「正当化」されたことになる。つまり、アメリカだけには、侵略行為が公認されているという状況、この時点で、現時点で議論されているアメリカ批判はすべて意味のないものになってしまう。そうなれば、果たしてどちらが本当のテロ国家、悪の枢軸国なのであろうか。

さらに、次なる標的をアメリカが定めたときのことを考えてみる。それが仮に「北朝鮮」であったとしたら…このあたりから、有事法制とのリンクが見え始める。そして、非正当性を正当化する「必要悪」が認められた時点で、同時にアメリカの暴走を制御するべき平和維持機関「国際連合」の意義は消失する、ということが考えられないだろうか。

また、冷静に考え直してみると、代替案こそ提示できなかったものの、戦争をする必要性がなかったことにも気付く。事実、イラクは大量破壊兵器を所持していなかった上に、戦争反対者が代替案を提示できないのと同じくらい、賛成者も、米国によるイラクへの内政干渉という問題に対する答えを出せていないからである。

最後に、賛成派、反対派の枠組みを超えて、班員全員が同意した考えを象徴するような言葉を紹介し、稿を閉じたい。

「戦争は常に悪である。たとえ相手が悪であっても」

アメリカ合衆国元大統領　ジミー・カーター